

林通じ行き交う記憶

文人の武蔵野

大岡昇平は、小説「武蔵野夫人」について、武蔵野の自然の中で行われる「劇」として構想した、と語っています。劇場の舞台に武蔵野の自然があり、そこに武蔵野の夫人たちが暮らしているとしよう。そこに誰かが突然帰ってくる、人間関係に変化が

大岡昇平 ⑧

起こります。それが「劇」です。多くの場合、「劇」は人の出入りから始まります。小説「武蔵野夫人」でも、若き復讐者として主人公の「勉」が南方の戦地から武蔵野に突然帰ってきます。それにより、武蔵野の自然の中で暮らしていた武蔵野の夫人たちは色めき立ち、ドラマが始まります。

戦争は、大学生だった勉を無頼な旅人にするともに職業兵士にしました。作中で「兵士は自然に接することが多い職業である」と規定されています。勉は兵士の必然としてビルマの自然と対峙し、イギ



森林や緑に包まれる都立野川公園（三鷹市で）

リス兵と戦ったのでしよう。戦地は彼を自然に近づけた。出征、敗戦、帰国を経て人間に絶望し自然を愛し、野生化した勉は、自然を味方につけながら武蔵野夫人たちの日常を壊していくのです。小説内の自然は、やや複雑で、勉の眼差しと記憶を通して描かれます。帰国して久しぶりに武蔵野の林に触れた勉は、南方の叢林を思い出します。

「ビルマ山中の記憶が甦った。熱帯の樹は四季の別なく落葉し、林中の道は細かった。そこで勉は武蔵野の林を思い出し、今、六月の武蔵野の林ではビルマの叢林を思った。」
 勉は今、武蔵野の林でビルマの叢林を思い出しています。そして、そのビルマの山中では武蔵野の林を思い出していたことを回想しています。武蔵野↓ビルマ↓武蔵野という空間移動を通して、武蔵野の自然を南方戦線の自然と同一視するような記憶を構成するに至ったのです。
 （武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

